

古代から続く祈りの道 - 大和の石仏巡行 -

第11回 生駒市・暗越奈良街道の石仏



元 久留米工業高等専門学校教授
伊藤 義文

1. 地理

くらがりごえ
暗越奈良街道は大阪の高麗橋から河内平野を横切り、生駒山の鞍部である暗峠（標高 455m）を越え奈良の興福寺まで続く街道で、大阪と奈良を結ぶ街道の中では最短距離、約 35km の歴史ある街道です（図 1）。暗峠を越えた後は生駒市を通過^{むろのきとうげ}、矢田丘陵を登り檜木峠を越えて追分本陣に入ります。ここで奈良方面と大和郡山方面への道が分岐しています。この街道の難所である暗峠付近には大和の郡山藩が敷いた石畳が現在も残されており（図 2）、国道 308 号線として「日本の道 100 選」に選ばれています。峠には本陣のほか、「河内屋」「油屋」等の茶店や旅館の跡が残されています。この国道 308 号線は急な坂道が続き、車がすれ違うのが難しいほどの道幅から「酷道」と呼ばれ、とても有名です。

2. 歴史

暗越奈良街道は、大阪と奈良を結ぶ往時の幹線道路でした。街道沿いには、伊勢参りのために建てられた石灯笼や道標が残され、多くの人々が伊勢参宮街道として利用してきたことが実感されます。特に江戸時代には道も整備

され、峠を過ぎると石灯笼や石仏が旅の辛さを忘れさせ、旅人たちは安全を祈願して石仏にお祈りしたであろうと思われます。

万葉集には生駒山に関係する歌が多く残されています。図 3（左）は生駒山を詠った防人の歌碑で、1993 年に暗峠近くに建てられたものです。万葉集研究で有名な犬養孝氏の揮毫によるもので、奈良時代からこの街道が利用されていたことが分かります。



図 1 暗峠からの大阪・奈良の全景



図 2 暗峠付近の奈良街道

CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH



万葉歌碑 (万葉集第20巻 4380番: 防人の歌)

芭蕉句碑

図3 万葉歌碑と芭蕉句碑



図4 地蔵菩薩とおかげ燈籠



図5 西地藏祠

「難波津を漕ぎ出て見れば神さぶる 生駒高嶺に雲ぞ たなびく」(万葉集)

また、松尾芭蕉もこの街道を通過して大阪入りし、道中で読んだ句が石碑(図3右)で残っており、歴史を感じられる街道でもあります。

「菊の香に くらがり登る 節句かな」

3. 石仏

3.1 暗峠付近の地蔵菩薩座像とおかげ燈籠

暗峠には地藏堂が立てられており、中には地蔵菩薩がおられ、錫杖を持って蓮華座上にお座りです(図4左)。左手にはおそらく宝珠を持っておられると思うのですが、涎掛けが大きすぎて見られませんでした。座像の地蔵尊というのは古いと言われていますが、光背面に文永五年(1268年)とあるそうです。地藏堂の近くに、磨滅した文政年代の

「おかげ燈籠」(図4右)や道標もあります。

3.2 西地藏祠

暗峠から奈良方面に少し下ると、西地藏祠があります。可愛らしいお地藏さんが4体祀られています(図5)。

3.3 地蔵菩薩と役行者

さらに坂道を下がっていきますと、西畑の左手に万葉歌碑や芭蕉の名の刻まれた案内石がある小さな広場があり、奥の方に室町時代の地蔵菩薩がおられます(図6左)。また、右手の崖上には文化五年(1808年)の役行者・前鬼・後鬼像がのけぞったように、斜面に倒れかけていました(図6右)。花崗岩を67cm 彫り込んだ像高170cmの像で、足駄を履いて前鬼・後鬼を肉彫りした室町時代らしい親しみのある像です。この辺りは役行者が拓いたという宝山寺や、千光寺が近くにある関係と思われる。



図6 地蔵菩薩(左)、役行者・前鬼・後鬼(右)

3.4 藤尾峠の石造阿弥陀如来立像

街道筋の藤尾集落には、線刻の阿弥陀如来立像があります(図7)。鎌倉時代中期の作で、生駒産の花崗岩で像高約120cmです。石仏は割れた自然石の半裁を平たくし、面相像形を薄肉彫りにして、そこに衲衣の袖先が広がりを見せ、体部の手足などを大まかな太い線刻で表現しています。本来は



図7 藤尾町・阿弥陀如来立像



図8 石仏寺の境内と如来立像、五輪塔



あったと思われる原石の上部が欠失しています。右手を掲げる施無畏印、左手の与願印という印相です。阿弥陀浄土に來迎引接^{いんじょう}する姿を表しています。面相は低い頭部の肉髻^{にくしだ}、耳朶などを大きく描いています。像容に向かって右側面下方に「文永七（1270）年广午（かのえうし）六月日／為西仏過去也」とあり、正面像容の左側中ほどに、「南無阿弥陀仏」の刻銘があります。阿弥陀如来の功德によって極楽往生できるという浄土思想が表されています。

3.5 藤尾町 石仏寺の秘仏・阿弥陀如来三尊

街道筋には融通念佛宗・石仏寺があります。境内には鎌倉時代後期の高さ208cmの五輪塔をはじめ、石仏や名号板碑あります（図8）。また、お寺の本堂内には秘仏・本尊の阿弥陀如来三尊像をはじめ地藏菩薩、阿弥陀立像が安置されています。これらは「伊行氏関連石造遺物群」として生駒市の指定文化財になっており、一般には公開されていません。生駒市デジタルミュージアム（<https://www.city.ikoma.lg.jp/html/dm/index.html>）にこれらの写真画像があり、今回、生駒市教育委員会の使用許可を得て紹介します。

生駒市指定文化財「伊行氏関連石造遺物群」（図9）

・本尊 阿弥陀如来座像：像高100.0cm 石造 鎌倉時代永仁二年（1294年）造立

光背銘から石工・伊行氏の作です。伊行氏は、鎌倉時代に南都を中心に活躍した石工・伊行末の一派に属していました。彫りは膝の出が少ない正面観を重視したもので、面相に張りのある肉取り豊かな像です。脇侍の観音・勢至菩薩立像は別造の二重円光背の両側に半肉彫りで表し、銘文は両脇侍の横に刻まれています。

銘「甲午二月十五日 大願主行佛 大工伊行氏」

・阿弥陀如来立像：総高182.0cm 像高139.0cm 石造 鎌倉時代 嘉元四年（1306年）造立

・地藏菩薩立像：総高182.0cm 像高139.0cm 石造 鎌倉時代

1) 來迎引接：仏語。阿弥陀仏が菩薩らと來迎して、衆生を極楽浄土へ導くこと



図9 石仏寺の石仏（画像提供：生駒市教育委員会）

4. まとめ

万葉集にも詠われた生駒山、この山を越えて大阪と奈良を結ぶ暗峠奈良街道沿いには、色種々の石仏が置かれ、人々の祈りの対象となっています。特に石仏寺は、その名の通りご本尊が石仏からできており、鎌倉時代の名工の作である阿弥陀如来座像をはじめ、数体の石仏が安置されています。これらの石仏を現代までお守りしている奈良の歴史の深さをしみじみと感じられました。今回の石仏の動画はYouTubeにアップロードしていますので、ぜひ次のキーワード検索で美しい動画をご覧くださいませ幸いです。

・検索：暗峠の石仏－ YouTube

<https://www.youtube.com/watch?v=QUdGqTXDkQM&t=13s>

著者略歴



1947年生まれ。72年、京都大学大学院卒業。以降、民間企業にて真空蒸着技術のフィルム応用や各種包装材料の開発に携わる。2004年、久留米工業高等専門学校教授。15年、退職。ライフワークとして石

仏調査を行い、その成果をYouTube（<https://www.youtube.com/channel/UCvJiTXSHW2MoqzwdpszXcOQ>）に公表している。

✉ itou910@zeus.eonet.ne.jp